むずかしい話し合いの準備：本書の解説

家庭の価値観を率直に話すことはできます。たとえば、「わが家では、信頼と責任を大切にしています」と伝えられます。ただし、価値観と、健康に関する事実、同意、安全、差別を受けないこと、助けを求める権利は分けて扱います。[27.2]

プライバシーを尊重し、秘密を保証しません

思春期には、親に知られずに相談できる場が必要になることがあります。国連の子どもの権利に関する指針は、発達しつつある自律性と秘密を守った相談へのアクセスを支持しています。ただし、診療への同意、記録を閲覧できる人、守秘の範囲、虐待の報告義務は、国や地域によって異なります。[27.7]

親からは、「できるだけプライバシーを尊重します。ただし、安全が脅かされていると思ったら、必要な助けを求めます。そのときは、安全にできる範囲で先に説明します」と伝えられます。「何があっても誰にも言いません」とは約束しません。

性の健康や守秘について確認したいときの最初の連絡先は、地域の性の健康に関するサービス、またはお子さんを診ている医療の専門家です。どのような相談ができるか、予約はどう進むか、親の同席なしで話せる時間があるか、何が秘密として扱われ、どのような場合に共有されるかを尋ねます。利用できる権利や守秘の範囲を推測しません。

危害の打ち明けには、調査ではなく保護で応えます

お子さんが虐待、性的な被害、強要、搾取、脅迫、同意のない画像共有について話したときは、会話の練習より安全を優先します。「それはあなたのせいではありません」「話してくれてありがとうございます」「安全のために助けを求めます」と伝えます。

詳しい経緯を何度も語らせたり、矛盾を問い詰めたり、証拠を集めるための面接を親が行ったりしません。名前を挙げられた相手に親が直接対決することも避けます。落ち着いて受け止め、本人の希望や選択肢を尊重しながら、安全と最善の利益を優先する対応が必要です。[27.8]

差し迫った危険、虐待、強要、性的搾取、強制結婚のおそれ[27.7]、女性器切除のおそれ、同意のない親密な画像による被害がある場合は、会話の準備や記入作業を中止します。女性器切除には健康上の利益がなく、すぐに生じる害と長期的な害があります。特定の文化や宗教を決めつけたり、被害を受けた人を非難したりせず、専門の医療と保護につなぎます。[27.9]

お子さんがいる場所の子どもの保護を担う公的な窓口、医療の窓口、または緊急の窓口へ連絡します。親が別の場所にいる場合も、お子さんのいる場所を基準にします。現地で安全にお子さんのそばへ行ける信頼できる大人がいれば連絡できますが、その人の到着を待って必要な公的支援を遅らせません。報告義務、診療への同意、証拠の扱い、守秘の例外は地域の現行ルールに従います。

記録を残す場合は、本人が自発的に話した要点と、連絡した窓口を必要最小限にとどめ、安全な場所に保管します。尋問の記録を作る目的ではありません。

一つの話題だけ準備します

話しにくいことほど、全部を一度に解決しようとすると会話が重くなります。まず一つの話題を選び、親自身が何を理解したいのかを整理します。お子さんが比較的安心できる時間と場所を選び、話す、書く、描く、端末やコミュニケーション支援を使う、途中で休むといった方法を提示します。

最初の言葉は短くします。たとえば、「決めつけずに聞きたいことがあります」「正解を迫る話ではありません」と始められます。質問も一つか二つに絞ります。「何を聞きましたか？」「聞くだけ、情報を調べる、誰かに相談する、のどれがよいですか？」などです。

必要なら、親子が相談できる信頼できる人を一人考えます。会話を中断したときは、いつ、どのような方法で話題に戻るかを押しつけずに提案します。お子さんは話さない選択や、別の大人と話す選択もできます。

この流れはインターネットがなくても使えます。別に整理したい場合は、任意の記入シートであるむずかしい話し合いの準備も利用できます。シートは会話の準備を助けるものであり、危害の調査記録ではありません。危険があるときは、完成を待たずに保護につなげます。

記入シート：parentingstagebystage.com/ja/shiito/muzukashii-hanashiai-no-junbi/

この解説の出典：parentingstagebystage.com/ja/shutten/